



# 中国河套地区東部における吐谷渾・党項関連文物遺跡の調査報告

村井, 恭子

---

**(Citation)**

神戸大学文学部紀要, 52:29\*-46\*

**(Issue Date)**

2025

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/0100494048>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100494048>



# 中国河套地区東部における吐谷渾・ 党項関連文物遺跡の調査報告

村 井 恭 子

## はじめに ——調査の目的と概況

2000年代に入り、考古学の方面で吐谷渾・<sup>タングート</sup>党項に関する新たな文物の発見が相次いで発表されている。代表的なものでは唐代吐谷渾王族慕容智の未盗掘墓や五代北宋の定難軍拓跋李氏一族の墓誌があげられよう<sup>1</sup>。ここから、筆者は唐～宋代における彼らの活動に関わる墓誌・碑刻などの石刻史料と遺跡の現状を調査した。加えて、中国国内では新型コロナウイルスの流行前より、私立博物館の設立や市・県レベルで博物館施設の整備が進められている。博物館の新設により文物資料の移管や遺跡・文物の展示状況の変化が発生すると考えられるため、その情報収集と現状の確認を行った<sup>2</sup>。

調査は2か所で行い、まず2023年2月末～3月初に河套地区（黄河大湾曲部内側、長城以南も含む）の東部地域（主に陝西省）の調査、つぎに2023年4月に甘粛省・青海省の吐谷渾関連遺跡・文物の調査を行った。本報告では前者の

1 吐谷渾に関しては、村井恭子・市来弘志「周偉洲「吐谷渾墓誌通考」（翻訳および解説・附録）」『神戸大学文学部紀要』48号、2021年、147～187頁で紹介している。党項関係の石刻に関しては、杜建録・鄧文韜主編『党項与西夏碑刻題記』三秦出版社、2022年が出版され、それぞれ拓本と録文が掲載されている。また、これら墓誌を利用して唐後半期～北宋の党項の状況を概説したものに、伊東一馬「定難軍節度使から西夏へ——唐宋変革期のタングート」（山根直生編『五代十国——乱世のむこうの「治」』勉誠社、2023年、257～270頁）がある。

2 中国では多くの博物館がWeChat（微信）の公式アカウントを設置しており、展示の情報や予約などはインターネットHPよりもこちらの方が充実している場合もある。

調査の状況を記すこととする。

### <河套地区東部調査>

時期：

2023年2月23日～3月3日（9日間）

行程：

①西安市→富県（富県博物館）→②延安市安塞区→榆林市靖辺県→③オルドス市城川鎮→④靖辺県→⑤榆林市横山区→⑥榆林市内→フフホト（内蒙古博物院）<sup>3</sup>

調査地の河套地区は、唐～宋代にかけて吐谷渾・党項の活動地域であった。とくに西夏を建国した党項拓跋李氏は無定河沿いの宥州・夏州・銀州に拠点を置いていたため、今回は無定河沿いの城塞を調査した。河套地区の地理的特徴は、乾燥地帯にあたり、概ね無定河・白于山を境に南は黄土高原の丘陵地帯（海拔約900～1900m）が、北は砂漠地帯（オルドス砂漠）が広がる。また、西安の一带は渭河に沿って東西に関中盆地が広がる（海拔約330～600m）。筆者はまず西安市より富県経由で靖辺県まで高速道路G65を北上して丘陵地帯から砂漠地帯に抜け、その後無定河に沿って東へ進み、榆林市内・横山区を調査した。後日さらに榆林からフフホトに北上した。ここでは上記行程の①～⑥の文物・遺跡と博物館について取り上げる。



図1 河套地勢および調査地

の後無定河に沿って東へ進み、榆林市内・横山区を調査した。後日さらに榆林からフフホトに北上した。ここでは上記行程の①～⑥の文物・遺跡と博物館について取り上げる。

3 西安市→榆林市の移動は自動車、榆林市→フフホトの移動は鉄道を利用した。

## 1 西安市内の博物館・遺跡

### (1) 陝西漢唐石刻博物館および阿房宮遺跡

2012年に設立された西安城外の未央区西南部にある私立博物館で、自設HPもあるほか現在までに収蔵品の図録が2冊出版されている<sup>4</sup>。文物はオークション等で購入されたものとみられ、主として漢～唐代の石像・仏像・仏塔や墓門、碑石および碑文拓本などを収蔵・展示する（収蔵件数は400点余り）。ガラス張りにされていない展示が多く、造像文・墓誌文の読解に非常に便利であった。学芸員による展示品の解説も有料で依頼できる。

灑東大道を挟んで北側には秦の阿房宮遺跡があり、現在は遺跡公園として開放されている<sup>5</sup>。筆者が訪問したときは遺跡の修復工事中で、宮の基礎部分（台地状になっている）の版築が確認できた。台地上部は鬱蒼とした林となっており、遺跡近隣の村の人々の墓地として利用されていたり、山羊が放牧されていたりした所もあった。



陝西漢唐石刻博物館



陝西漢唐石刻博物館内部

4 HPのURLは、<http://www.htmuseum.com/>。一部の展示品もこのHPの「典藏」のページから見る事ができる。本博物館が刊行した図録は、秦航主編『陝西漢唐石刻博物館』文物出版社、2021年と秦航ほか主編『石鐫春秋：陝西漢唐石刻博物館』西安出版社、2024年がある。

5 阿房宮は秦始皇帝の35年（前212）に着工した宮殿。のち項羽によって焼かれたと言われる。なお筆者は未参観だが、陝西漢唐石刻博物館の西隣に秦阿房宮遺跡博物館がある（百度百科に紹介ページあり）。

## (2) 陝西考古博物館

2022年4月に正式開館した陝西省考古学研究院の公立博物館で、中国で初となる考古専門の博物館である<sup>6</sup>。同研究院は従来明清城壁内の大雁塔附近にあったが、博物館と同じ敷地内に移転した（筆者が訪問した時点では、大雁塔の旧所に一部残っていた状況だった）。位置は西安城外南の長安区（文苑南路の最南端）にあり、城内の大雁塔付近から自動車でも移動したところ1時間以上かかった<sup>7</sup>。博物館内は陝西省内で発掘された文物を丁寧な解説パネルとともに展示し、さらに墓葬の復元展示などもあり考古発掘の状態がわかりやすい内容となっていた。展示物についても、十六国時代の女楽俑など貴重な文物が多かった。館内展示は1～3階の5つの展示室に分かれている。観覧面積が大きいので時間には余裕をもって参観した方がよい。



陝西考古博物館



十六国墓副葬品

## 2 延安市安塞区塞木城子：塞門寨遺跡

高速道路G65は延安市を超えると安塞区から靖辺県に達するが、ここは北のオルドスから遊牧民が西安（長安）方面に侵攻するルートの一つであった。このため古来より中国王朝は険しい峡谷の地形を利用して城塞を建設し、防衛拠

6 研究院と博物館のHPのURLは、<https://www.shxkgy.cn/nav>。ただし現在、研究院のページのみ閲覧可能（博物館のHPは設置中。百度百科にも博物館の紹介ページがある）。普通の博物館と異なり、月曜ではなく水曜が休館日となっている。

7 現在西安は郊外に街区が展開しており、とくに南部の長安区は西北大学や陝西師範大学など多くの大学が新キャンパスを設けている。



塞門寨城壁の一部



塞門寨から北にG65を望む

点としてきた。有名なものでは蘆子関と塞門寨があり、前者に関しては杜甫が「塞蘆子」を詠んでいる<sup>8</sup>。当地は唐代以降、吐谷渾・党項の活動地点となり、とくに党項と唐・宋王朝との戦闘がしばしば発生している。

筆者はG65を鎌刀湾料金所で下りて塞木城子にある塞門寨遺跡を搜索した。城壁の一部を発見し版築などを確認したが、城壁を裁断するかたちで現代の道路が建設されていたため、城塞の全体像を現地で確認することはできなかった（Google Earthの衛星画像でも確認が難しい<sup>9</sup>）。城塞は丘陵の中腹にあり谷底の道路を見下ろせる位置にあった。また近くに川があり取水にも便利だったとみられる。この遺跡については『安塞県志』に、「1982年に塞門城内から戦闘で死亡した蕃人・漢人の遺骸と墓碑が発掘された」とあり、その碑文に「延安府符坐准、朝旨收収蔵漢番遺骸、本寨管下地、分收到二十六副埋廕。宋元符三年七月六日立石」と記されていたことが紹介されている<sup>10</sup>。元符三年（1100）は北宋徽宗即位初年にあたり、26人分の遺骸は西夏との戦闘による死者とみられる。

8 嚴耕望著『唐代交通図考』第1巻篇7「長安北通豊州天德軍驛道」、中央研究院歴史語言研究所（台北）、1985年、237頁。

9 37° 12'01.8"N 108° 58'50.9"E（おおよその位置）。

10 安塞県地方志編纂委員会編『安塞県志』（陝西省地方志叢書）陝西人民出版社、1993年、624頁。このほかインターネットでも紹介されている。陝西省図書館「陝西景觀数拠庫」の「塞門寨」[https://www.sxlib.org.cn/dfzy/sxjg/ya/asxjg/201612/t20161220\\_547262.html](https://www.sxlib.org.cn/dfzy/sxjg/ya/asxjg/201612/t20161220_547262.html)および「蘆子関、塞門寨の歴史成因」[https://www.sxlib.org.cn/dfzy/sxjg/ya/asxjg/201612/t20161220\\_547260.html](https://www.sxlib.org.cn/dfzy/sxjg/ya/asxjg/201612/t20161220_547260.html)などがある。

### 3 オルドス市城川鎮：宥州城遺跡

筆者は1日目の夜に丘陵地帯を抜けて靖辺で宿泊し、翌朝宥州城遺跡に向かった。宥州城は内モンゴル自治区オルドス市鄂托克前旗城川鎮の中心地の東北、城川嘎查の北1km、省道S216の北側にあり、Google Earthの衛星画像でも容易に確認できる<sup>11</sup>。

史料では『旧唐書』巻38地理志、関内道宥州条<sup>12</sup>に、以下のように設置の沿革が記されている。

宥州 調露初(679)、六胡州也。……元和九年(814)、復於経略軍置宥州、郭下置延恩県。十五年(820)、移治長沢県、為吐蕃所破。長慶四年(824)、夏州節度使李祐復置。領県三、戸七千八十三、口三万二千六百五十二。去京師二千一百里、去東都三千一百九十里。

また『唐会要』巻70州県改置上、関内道条<sup>13</sup>にも、

元和十五年九月、夏州節度使李祐請置宥州於長沢県。

とある。記述に一部齟齬があるものの、現存の遺跡は元和十五年九月に長沢県に移置された際の州城で、唐代では当地の約3万3千人の人口を治める拠点となった。また夏州節度使李祐が復建したと記すように、宥州城は夏州城(統万城)まで自動車で1時間半ほどの位置にあり、連携の面でも非常に便利だったと思われる<sup>14</sup>。

宥州城の城壁は北712m、南727m、東530m、西555mの長方形に近い台形で、北側に城門がなく、東西南に城門と甕城がある。城壁には角台と48個の馬面

11 37°42'42.6"N 108°19'37.4"E。衛星写真では城壁・馬面・護城河のほか、遺跡内部の建物基壇跡が確認できる。また南城門と省道S216の間に関城のような四角形の遺構、北城壁の中央北側にも小さな城壁のような遺構(物見台か)が確認できるが、報告書には言及がない。

12 中華書局、1975年、1418～1419頁。

13 上海古籍出版社、1991年、1476頁。

14 調査報告書は、唐代では城壁の北2kmに無定河が流れており、両城間において軍事物資の漕運を行うことができたこと述べている(王歆・楊延濤・徐磊・侯国建「城川城址価値与保護策略研究」『芸術与设计：产品设计』2021年第10期、76頁)。



宥州城南城壁外側（城門の東側）



城壁（馬面）の版築



南城門の甕城内部（南向き）



城壁外側南東角（S216から）

があり、城壁から10～15m外側に護城河（幅20～22m）がある<sup>15</sup>。百度百科では城壁の高さは現在のところ2.5～5m、城壁の厚さは3～10mの状態だと記している。また城内からは瓦や陶器片のほか唐宋および清代同治年間の貨幣が見つかっているという。筆者は南側の城壁と甕城、護城河の跡を確認した。城壁の高さは2m以上あり、馬面や城壁の版築もはっきりと残っていた。ここは北の砂漠地帯と南の丘陵地帯の境界にあたり、唐代では南の丘陵地帯に侵攻する遊牧勢力をここで防ぐ役割を持っていた。このため城壁は高く厚く、防衛に適した構造となっていたとみられる<sup>16</sup>。城壁はこの土地の白っぽい灰褐色の土で築かれており、現地では省道S216から視認できた。

15 前掲王欽ほか「城川城址価値与保護策略研究」、76～77頁。百度百科は同一の遺跡に対し「宥州古城」「城川城址」の2つの紹介ページがある。

16 前掲王欽ほか「城川城址価値与保護策略研究」、76～77頁。

#### 4 榆林市靖辺県：夏州城遺跡（統万城遺址）

筆者は宥州城から自動車です漠の中の道路を走り夏州城に向かった。この州城の基礎は十六国時代の夏の建国者である赫連勃勃（在位407～425年）が造営した都城であり、統万城の名で知られている。唐代では夏州の治所として用いられ、宥州と同じく唐末から北宋にかけて党項拓跋李氏の拠点の一つとなった。無定河北側の沙漠地帯に築城されており、Google Earthでも鮮明に見える<sup>17</sup>。



夏州城（統万城）西城南西角

非常に有名な都城遺跡で多くの研究があるため、遺跡の状態については省略する<sup>18</sup>。参観状況に関して、筆者が2014年に訪問した際は自由に立ち入り可能だったが、2023年より国家考古遺址公園となり、保存対象かつ観光名所として整備された結果、入場料を支払って参観する形式となり、城壁の周囲に柵が設けられて自由に立ち入りできなくなった。一方、敷地内に新たに博物館が建設され、統万城から出土した文物を展示し、その歴史を紹介している。筆者は残念ながら月曜休館日に訪問したため直接は参観できなかったが、公式HP<sup>19</sup>などで様子が確認できる。

<sup>17</sup> 37° 59'46.1"N 108° 51'07.3"E。

<sup>18</sup> 考古発掘報告書としては、邢福来・侯甬堅主編『五至十世紀統万城夏州城考古発掘と研究』三秦出版社、2022年（全4冊）が出版されている。また、統万城を歴史地理から考察したものに、市来弘志「農牧境界線上の首都——統万城と関中平原の歴史地理的關係再考」『郵政考古紀要』75号、2021年、1～13頁などがある。

<sup>19</sup> <https://www.tongwanchengyizhi.com/>。

## 5 榆林市横山区

### (1) 波羅鎮：波羅堡古城

筆者は無定河に沿って東に進み、省道S204を走り夏州と銀州の間にある波羅鎮に向かった。波羅堡古城は無定河南岸の丘陵地形を利用した城塞であり、無定河を自然障壁として高台から北のオルドス砂漠に続く平地を望むことができる位置にある<sup>20</sup>。現在は観光地として整備されており、内部には寺廟跡や明代の寺塔（凌霄塔）のほか廢墟も見られるが、当地の住民もなお生活している。現地観光案内の看板の説明によると、城壁や古建築群は明の正統年間（1436～1449）以降のものだが、軍事要塞としての創建は北魏時代から始まるらしい（典拠不明）<sup>21</sup>。ここも唐末から北宋にかけて党項拓跋李氏の勢力範囲に含まれた地域である。

唐代の史料にはとくに記述がないものの、城外の下には唐代創建と言われる接引寺（旧名は波羅寺）がある。波羅堡の丘陵地の岸壁面に大仏が彫られており、それを覆う形で寺院が建立されていた。寺の看板には、創建は太宗貞観年間（627～649）で、宣宗期（846～859）に改築され、北宋と西夏が対立した時期に李元昊がこの寺を西夏の国寺としたことなどが記されていた（典拠不明）。寺内を調査したが唐宋時期の石碑類は見当たらなかった。

時間の関係で訪問できなかったが、この付近に無定河湿地自然保護区もある。今回の調査では無定河を実見することも目的としていたが、乾燥砂漠地帯に接する河川としては春先でも水量の豊かな河川だったことが非常に印象的だった（移動の途中で魚の養殖場も見られた）。

---

<sup>20</sup> Google Earth: 38° 03'30.8"N 109° 26'25.0"E。

<sup>21</sup> 観光案内HP「博雅文化旅游網」の「横山区文物古迹紹介」に「波羅古堡」や「接引寺」の紹介ページがあり（[http://www.bytravel.cn/view/wenwu/index1784\\_list.html](http://www.bytravel.cn/view/wenwu/index1784_list.html)）、ここでも波羅堡が北魏時代の創建だと記されるが典拠を示していない。波羅堡や波羅寺については『明史』や『関中勝蹟図志』などに見えるが、北魏時代の創建であることは確認できなかった。



波羅堡北城壁から無定河を見下ろす



波羅堡西門



凌霄塔（明代）



接引寺（波羅堡）

## (2) 党岔鎮北莊村：銀州城遺跡・古銀州博物館

横山区は外国人の宿泊には不便なため、筆者は一旦榆林市内で宿泊した後、翌日横山区の銀州城遺跡と古銀州博物館に向かった。博物館館長の劉生發氏の案内で丘陵を上り、北の城壁を確認した。波羅堡古城と同様に無定河南岸の丘陵地形を利用しているが、こちらはより山城に近い状態だった。1980年に考古報告書<sup>22</sup>が出ており、これによれば銀州城は丘陵地の上古城とその下の平地に築かれた下古城の城壁が並列になっていた二重城であった（図2参照）。城壁は地形に沿って築かれ、不整形であるためGoogle Earthの衛星画像ではわかりづらい<sup>23</sup>。

22 載心新「銀州城址勘測記」『文物』1980年第8期、62～67頁。本文の図2城壁図は63頁の図三をもとに筆者が加筆修正を行ったもの。

23 37°58'03.3"N 109°49'16.0"E（おおよその位置）。なお、インターネットの紹介ブログでドローンによる城壁の鳥瞰写真を見ることができる（烏何有之郷大樹上「銀州故城：

筆者が見た上古城の城壁部分は概ね1～2mの高さがあり、壁面にはヤオトン状の穴が開いていた（内部に城壁の版築が確認できた）。劉氏によれば、これは清朝同治年間の陝西・甘肅で発生した回民（ムスリム）の反乱時に穿たれた穴で、近隣住民が反乱を避けてここで生活していたとのことである。当地は一見乾燥しているように思われるが、黄土の地面を掘ると水が出るので農耕が可能だということだった。

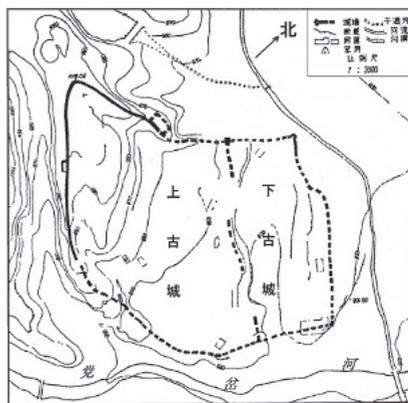


図2 銀州城城壁図

城壁について、『資治通鑑』巻232徳宗貞元二年（786）十二月条には、「吐蕃又寇銀州。州素無城、吏民皆潰<sup>24</sup>」とあり、この時期銀州には城壁が築かれていないという記録がある一方で、唐の銀州城の位置を確定する根拠となった晩唐の「李公政墓誌」にはその埋葬地を「咸通九年（868）十二月七日、遷厝於州城南岫山之左」と記しており、少なくとも城壁が9世紀には存在したことを示している<sup>25</sup>。また唐代の記録では現在のような二重城だったかは不明であり、少なくとも宋代以降はこの形状だったようである<sup>26</sup>。

盛産良馬後被西夏占拠、怪不得北宋振作不起来」<https://baijiahao.baidu.com/s?id=1807155115419258746&wfr=spider&for=pc>、同名の微信アカウントでも閲覧可能)。

24 中華書局、1956年、7475頁。

25 李公政の墓は党岔鎮南莊村の党岔中学の北側から出土している（前掲載応新「銀州城址勘測記」、62頁および陳政和・周鳳挙「党岔古城址及周圍古遺址考察筆記」、陳政和主編『上郡膚施初考』陝西人民出版社、2010年、62頁）。なお、『周書』巻49稽胡伝には「天和二年（北周武帝567）、延州總管宇文盛率衆城銀州」（中華書局、1971年、898頁、『北史』も同文）と城壁を築いているが、異なる地点かもしれない。『元和郡県図志』巻4関内道、銀州条に「符秦建元元年（365）、自驄馬城巡撫戎狄、其城即今州理城是也」（中華書局、1983年、104頁）とあり、「今」とは本書の成立時期である813年頃と考えると9世紀には城壁が修復などを経て存在したとみられる。

26 前掲載応新「銀州城址勘測記」参照。

唐末の党項拓跋李氏につながると考えられている玄宗開元期の「拓跋守寂墓誌」には、墓主が「銀州勅賜之第」で病死したと記されることから、ここ（おそらく下古城）に玄宗から賜った邸宅があったはずである。なお、この墓誌は横山区韓岔郷元岔峁村から出土しており、誌文に



上古城より北に平地を見下ろす

その墓葬地を「銀州儒林県新興郷招賢里歛樂平之原」と記している。位置は銀州城から西南に直線距離で約25km、波羅堡古城から南東に約28kmの地点で、無定河より南の丘陵地帯にあたる。おそらくここに拓跋守寂一家の墓陵があり、守寂は銀州城で死去したのち帰葬されたと考えられる<sup>27</sup>。

つぎに劉氏の案内で古銀州博物館を訪問した。ここは博物館の名称を有するが実質的には劉氏所有とみられる家屋を文物の陳列館としており、参観するには劉氏に連絡を取らねばならない。内部の文物<sup>28</sup>もほぼ劉氏が集めたものである。この周囲には漢代の墓葬群もいくつかあるためか<sup>29</sup>、漢代の壺がいくつも無造作に積まれていた。また古代の石器類や各年代の陶器類、墓の副葬品の俑や明器、銅銭などの貨幣があった。そのほか宋代の刻字のある銅鏡や太平天国の乱の鉄砲や鉄剣、民俗資料も多く陳列されていた。これらは劉氏が拾ってきたものや買い取ったものが雑じっているとのことだった。この周辺では少なく

27 同じく開元期の事例では、慶州の党項「拓跋馱布墓誌」には、墓主が長安の邸宅で死去後、慶州北部の「本蕃」に帰葬されたと記す（現在の陝西省吳起県）。また靈州にいた吐谷渾王族「慕容曦光墓誌」「慕容明墓誌」には、墓主が涼州の「先塋」（慕容氏王陵の地、現在の甘肅省武威市南郊）に帰葬されたと記す。以上から類推すれば、拓跋守寂一家の墓葬地が「銀州儒林県新興郷招賢里歛樂平之原」にあった可能性がある。あるいはここが「本蕃」ないしは勢力下の部落所在地だった可能性もある。

28 2010年時点の収藏品リストは前掲陳政和主編『上郡膚施初考』、216～221頁参照。

29 前掲陳政和・周鳳挙「党岔古城址及周圍古遺址考察筆記」参照。

中国河套地区東部における吐谷渾・党項関連文物遺跡の調査報告



上古城北城壁外側



上古城北城壁内側



博物館内部と劉生發館長（左）



胡人俑（唐代か）

とも唐～宋の墓誌が13件ほど発見され2006年に党岔鎮で発見された「野利氏夫人墓誌」を除く12件<sup>30</sup>がかつてはここに保管されていたが、のち横山区博物館などに移管され、現在は明の万暦年間のもものが1件あるだけだった。劉氏によるとくに価値の高い文物は地方政府などの公的機関に移管されたとのことである。また、文物は博物館以外に劉氏の自宅の方にも保管されているとのことだった。

30 白賽玲「横山墓誌研究」西北大学修士論文、2011年。収録墓誌のリストは拙稿「唐末五代オルドス・河東の党項・吐谷渾関係石刻史料——研究状況の紹介と考察」平成27～29年度科学研究費補助金（基盤研究C）成果報告書『唐～宋代オルドス地域の歴史的構造の研究』2018年（課題番号15K02894）、20頁附録1の②を参照のこと（神戸大学リポジトリにPDFあり）。

### (3) 横山区博物館

筆者はつぎに横山区の中心市街地にある横山区博物館を訪問した。区の政府庁舎近隣にある文広大樓（文化和旅游文物広電局）の4階のフロアが博物館となっており2019年5月より開館した<sup>31</sup>。ここには当地で発見された墓誌など碑刻がある。今回筆者が確認できたのは、武周「阿才墓誌」、唐「王節墓誌」「王友賢墓誌」「竇伯歳墓誌」、後周「宋従実買地券」、北宋「野利氏夫人墓誌」のほか、統万城の南から出土した武周「曹保墓誌」および墓誌蓋のみの「康君墓誌」である<sup>32</sup>。

当博物館はオフィスビルの中にあり、外国人が突然訪問できるような雰囲気ではなかったが、2027年に独立した博物館が開館予定だということなのでその際は自由に参観できるのではなかろうか。



竇伯歳墓誌

31 現在日本から見られなくなったが、横山区人民政府のHPにこの博物館の紹介文が以下のように掲載されていた。

「横山区博物館2019年開館，面積350平米，投資106萬元。現有各類藏品11301件，包括化石、石器、玉器、陶瓷、銅器、画像石、瓷器、古善本、木器、雜器、錢幣、墓誌銘12類。其中國家一級文物2件，二級文物22件，三級文物153件，一般文物11124件。展覽利用各時代、各類別歷史文物及革命文物的陳列展示，生動鮮活地再現了橫山厚重、輝煌的歷史。」(<http://www.hszf.gov.cn/xwzx/zgxw/20121.htm>，2024年2月22日閲覧。現在不可。)

32 「阿才墓誌」「王節墓誌」「王友賢墓誌」は前掲陳政和主編『上郡膚施初考』に録文のみ掲載されている。後周「宋従実買地券」と北宋「野利氏夫人墓誌」および今回確認できなかった後唐「白全周墓誌」は前掲杜建録・鄧文韜主編『党項与西夏碑刻題記』の上巻に拓本と録文が掲載されている。

## 6 榆林市榆陽区：古代石刻芸術博物館

筆者は横山区の調査を終えたのち、市街の博物館を調査した。当初は榆林市博物館が新たに開館したと聞いていたが、実際は建設中だったため参観できなかった。また、市街地には6つの博物館があり、筆者はそのうち朔方博物館<sup>33</sup>と古代石刻芸術博物館を訪問した。前者は企業所有の博物館で、土器や青銅器・動物の骨格標本などを多く展示するも、石刻は数点のみであった（唐開元年間の墓誌が1件）。後者の古代石刻芸術博物館も私立博物館で、場所は榆林市榆陽区の夫子廟旅游步行街<sup>34</sup>のなかにあり、明清時代の榆林城の城壁のすぐそばにある。

古代石刻芸術博物館は墓誌を中心に魏晋南北朝・隋唐から近代にいたる碑刻類を300件余り収蔵している。西北大学の李浩教授らが整理を行い、最近この博物館の墓誌資料集が刊行された<sup>35</sup>。この資料集では167件（内訳：西魏・北周2件、隋10件、唐144件、後唐1件、宋1件、金1件、明7件、時期不明1件）の墓誌拓本写真と録文を掲載している。収蔵品の中心は斉志氏の個人コレクションであり、概ね購入の形で収集されたため出土地点などは不明であるが、資料集序文によれば、墓葬地は多くが渭河流域の関中地区で、長安（西安）南郊のものが最も多いという。

墓葬地に関して注目したいのは、統万城の南から出土した唐代墓誌が9件あ

---

33 現在日本から見られなくなったが、榆林市榆陽区人民政府のHPには以下のような紹介ページがあった。

「榆林朔方博物館筹建于2017年，是朔方文化投资集团股份有限公司旗下的一家民办博物馆，博物馆位于榆林市高新技术产业园区中兴路1号朔方·陕北古风文化园院内，博物馆占地面积13320平方米，馆建面积4500平方米。朔方博物馆，立足陕北收藏、陈列了陕北地区自然演变的见证物，和人类文化的遗存物等二万余件珍贵藏品。展品以历史年代为主线，突出反映了陕北地区农耕文化与游牧文化相互冲突、相互融合的历史特点。」（<http://wljy.gov.cn/n-show-1961.html>、2024年2月22日閲覧。現在不可。）

34 文廟（夫子廟）を中心とした観光遊覧区画で、古物市場やいくつかの小規模博物館・飲食店が並んでいる。ここからさらに東にいくと榆林城南門（鎮遠門）などの古建築を見ることができる。

35 李浩主編『榆陽区古代碑刻芸術博物館藏誌』中華書局、2024年。

る点である（下記一覧表参照）<sup>36</sup>。そのうち「張令光墓誌」（No.069）のような安北都護府の武官や「劉愬墓誌」（No.071）のような隴右監牧の官についての人物が含まれる点も興味深い。このほか、夏州に関係するものとして西魏の「大魏夏州世界沙門統銘」（No.001）も注目される。

<統万城外南部埋葬墓誌一覧表>

資料集No.	墓誌名 (生没年)	墓誌題	埋葬 時代	備考
042	歩儉墓誌 (628-691)	大周故歩君墓誌并序	武周 天授2	「葬於統万城南原」
044	臧徳墓誌 (不明)	大周故臧公墓誌并序	武周 天授2	「合葬於統万城南原」
046	王英哲墓誌 (628-693)	大周故処士上柱国王君之 墓誌銘	武周 延載1	「遷窆於統万城東南原」
049	馬全墓誌 (681-705)	大唐故馬守貞墓誌并序	唐 神龍1	「合葬於統万城南十里之原」
050	辛愬墓誌 (594-660)	大唐故昭武校尉上騎都尉 辛公之墓誌	唐 神龍2	赤水軍副使。「合葬於統万 城南廿里原」
051	李君墓誌 (622-708)	大唐故游騎將軍李君墓志 銘并序	唐 景龍2	夫人賀魯氏。「合葬於統万 城南一百二十里原」
069	張令光墓誌 (691-734)	大唐故游騎將軍陝州上陽 府折衝都尉安北營田副使 張府君墓誌銘并序	唐 開元23	「帰葬於夏州先塋」 兄の張令賓は麟州刺史。
071	劉愬墓誌 (674-736)	唐故隴右西使左十四副監 劉公墓誌銘并序	唐 開元24	隴右監牧の官。「遷窆於夏 州城南廿里原」
073	張亮墓誌 (631-705)	唐故張公之墓誌并序	唐 開元29	右羽林衛飛騎。「合葬於統 万城廿五里高原」

当博物館にはこの他にも、唐代の「李百葉墓誌」（No.018）や『安祿山事迹』の著者姚汝能が書いた2件の墓誌（No.129、145）など貴重な墓誌を数多く展示

36 統万城付近から出土した墓誌については、邢福来・侯甬堅主編『五至十世紀統万城夏州城考古發現与研究』（前掲）図版編の「統万城周辺墓葬出土文物図冊」第一章に隋～北宋の墓誌拓本画像61点（隋3、唐51、後唐1、後晋4、北宋2）を掲載している。筆者が確認したところ、康蘭英主編『榆林碑石』三秦出版社、2003年掲載の墓誌との重複が多く認められた。一方、横山区博物館の「曹保墓誌」および本文一覧表のものは含まれていなかった。



李仁宝墓誌蓋



古代石刻芸術博物館内部

している。最も目玉となるのが唐開元二十四年（736）の「安優婆姨塔銘」（No.070）で、漢語漢字・ソグド語ソグド文字のバイリンガル碑文である<sup>37</sup>。そのほか唐大暦八年（773）のウイグル「英義建功毗伽可汗（牟羽可汗）之季弟」である「移建勿墓誌」（No.095）がある。そして、吐谷渾可汗慕容諾曷鉢の次女の「成月公主墓誌」（No.034）は、2018年には別の博物館にあったが2020年頃ここに移管されたようである<sup>38</sup>。筆者は墓誌蓋と本体ともに実見することができた。刻字がやや浅いため拓本ではよく写らない文字も墓誌石を見れば確認可能な状態だった。さらに、党項拓跋李氏の一族「李仁宝墓誌」「破丑氏墓誌」の夫婦墓誌も墓誌蓋・本体ともに当博物館で確認した。しかし資料集には両方とも掲載されていない<sup>39</sup>。

37 この碑文についてはすでに釈読が行われている。李浩「新見唐代安優婆姨塔銘漢文部分釈読」『文献』2020年第3期、151～166頁および畢波・辛維廉「新發現安優婆姨及語塔銘之粟特文銘文初釈」『文献』2020年第3期、167～179+2頁。Bi Bo & Nicholas Sims-Williams, 2020, "The Epitaph of a Buddhist Lady: A Newly Discovered Chinese-Sogdian Bilingual." *Journal of the American Oriental Society*, 140 (4), 803-820.

38 李浩「新見唐代吐谷渾公主墓誌の初歩整理研究」『中華文史論叢』2018年第3期、2頁では「陝西夏州絲綢博物館蔵」としていたが、同著『磨石録』（台湾聯繫出版、2020年）に収録後、「陝西榆林榆陽区古代碑刻芸術博物館蔵」に改められている（197頁）。

39 この2件の墓誌については、前掲杜建録・鄧文韜主編『党項与西夏碑刻題記』上巻に掲載されている。ただし所蔵情報を「榆林市博物館所蔵」としている。

## 結びにかえて

筆者はゼロコロナ政策期間の2022年10月末から半年間中国（北京大学）に渡航したが、予想以上に行動を制限され、政策終了まで数ヶ月北京から出ることができなかった。また感染拡大で一時は大学キャンパスが封鎖され、図書館などの施設も使用不可となった。こうしたことから、今回の現地調査では事前の資料調査が十分に行えず、遺憾ながらインターネット情報に多く頼ることとなった<sup>40</sup>。

ゼロコロナ政策期間においては人の行動制限のほか、私立公立を問わず多くの博物館・美術館といった施設では長期休館したり開館しても一部のみの展示となったり、入場者数を管理するため事前のインターネット予約が必須となったりと特殊な状況にあった。その後、当政策が終了したことを受けて様々な制限が解消された。現在では完全に平常の状態に移行しており、政策終了直後に筆者が訪問したときの状況とはまた異なっていると思われる。

今回短い時間で多くの文物や遺跡の調査が可能となったのは、受入先の北京大学歴史系・中国古代史研究中心のほか、訪問先の陝西省考古研究院をはじめとする各関係機関・博物館の人々の多大なる助力を得られたおかげである。関係者各位に対し心より謝意を表したい。

※本稿はJSPS科研費17KK0026・21K00891の助成を受けたものである。

---

40 今回取り上げた各インターネットURLの最終閲覧日は2025年2月13日である。